

ウェールズ再発見

(その 7)

ウェールズ人看護婦エリザベス・デイヴィスとフローレンス・ナイティンゲール

Wales Rediscovered

- Part 7 -

The Welsh Nurse Elizabeth Davis and Florence Nightingale

吉賀 憲 夫

Yoshiga, Norio

Abstract Elizabeth Davis (Cadwaladur) was a Welsh woman who went to the Crimea to serve as a nurse. Her life was recorded in 1856 by Jane Williams in *An Autobiography of Elizabeth Davis, Betsy Cadwaladyr: A Balaclava Nurse*. The highlight of the autobiography is Elizabeth Davis's remark about Florence Nightingale which differs from Nightingale's reputation in England then. Cecil Woodham-Smith, a biographer of F. Nightingale, wrote an influential biography and accused Elizabeth of escaping from Miss Nightingale's discipline. Because of this, Elizabeth became a notorious nurse in Woodham-Smith's book. However, Elizabeth's autobiography gives us a different image of Elizabeth trying to do her best as a nurse. Elizabeth's autobiography is very interesting and useful for us even today.

1

エリザベス・デイヴィス (Elizabeth Davis:1789-1860)は中部ウェールズのバラに生まれた。彼女はクリミア戦争中、トルコのスクタリにあったトルコ軍兵舎を病院に転用したいわゆる「兵舎病院」の看護であつたが、F・ナイチンゲール(Florence Nightingale:1820 -1910)の「厳格な規律」から逃げだすために、クリミア半島南端のバラクラヴァの陸軍病院へと転属したという。その後も、彼女はナイティンゲールに対し悪意を懐き続けた「悪役」看護婦として、セシル・ウッドダム=スミス (Cecil Woodham-Smith) 著の F・ナイチンゲール伝に登場する。

数多くあるナイティンゲール伝のなかで、重要なものが 2 冊ある。ひとつは 1913 年に出版されたサ

ー・エドワード・クック(Sir Edward Cook)による伝記『ナイティンゲールの生涯』(*The Life of Florence Nightingale*)である。それは夥しい公文書やナイティンゲール関係者の書簡等を利用し、ナイティンゲールの死後わずか 3 年にして出版された。その伝記において、クックは彼女を単なる「ランプをかざす貴婦人」という従来の理想的看護婦としてのイメージから、類い希な思想の持ち主で、かつ優秀な管理者としての新しいナイティンゲール像を世に示した。しかし、彼は多くの資料を持ちながらも、生存中のナイティンゲールの身内に配慮し、彼らにとって都合の良いものだけを使い、「ナイティンゲール家公認」の伝記にしてしまった。

もうひとつの重要なナイティンゲール伝(*Florence Nightingale, 1820-1910*)が 1950 年に出版された、セシル・ウッドダム=スミスのナイチンゲール伝である。この伝記は、人間関係が克明に描か

れていることが特徴のひとつであり、クリミア戦争時の看護婦や医師を始めとし、様々な人々とナイティンゲールの関係が良くわかる。エリザベス・デイヴィスも、クックの伝記では実名はあげられていないが、セシル・ウッドダム=スミスの伝記では彼女の名は明記されている。そのナイティンゲール伝におけるエリザベス・デイヴィス像は、例えば次のようなものである。

However, certain nurses, led by a Welshwoman, Elizabeth Davis, from Mary Stanley's party, were determined to escape Miss Nightingale's discipline. . .¹⁾

A constant rebel was Mrs. Elizabeth Davis, the Welshwoman brought out by Mary Stanley. She had begun to dislike Miss Nightingale before she saw her. "I did not like the name of Nightingale. When I first hear a name I am very apt to know by my feelings whether I shall like the person who bears it", she wrote.²⁾

このように、セシル・ウッドダム=スミスの伝記により、デイヴィス夫人³⁾はナイティンゲールに楯突いた看護婦として悪役を演じることにより、歴史に「汚名」を残すことになってしまった。このように描かれたエリザベス・デイヴィスとは一体どのような女性であったのだろうか。

エリザベス・デイヴィスの資料としては、歴史家であり伝記作家であったアスガヴェル(Ysgafell)ことジェーン・ウィリアムズ(Jane Williams: 1806-85)が、1856年にクリミアから帰還したエリザベスをロンドンでインタビューし、それを編集した『エリザベス・デイヴィス自叙伝・バラクラヴァの看護婦、ダヴィッツ・カドワラドルの娘』がある。この「自叙伝」はエリザベスが語ったクリミア戦争における彼女の世評とは異なるナイティンゲール像に興味を覚えたジェーン・ウィリアムズが、エリザベスから長時間わたり聞き取った彼女の人生の物語を1857年に出版したものである。そのようなわけで、この「自伝」のハイライトはエリザベスのナイティンゲール批判にあるのだが、同時にこの本はウェールズ労働階級婦人史としても興味深いものである。

エリザベスは日記をつけていたわけではない。ジ

ェーンはエリザベスの古く曖昧な記憶を同時代の記録や資料と突き合わせ、彼女の物語の信憑性を高め、またコメントをつけることにより正確を期した。そのことはこの本がエリザベスによる「自叙伝」というよりも、ジェーンによる「エリザベス・デイヴィス伝」という趣を持つ。当然のことながら、そこにはジェーン・ウィリアムズという人物の視点があるのである。

ここでジェーン・ウィリアムズについて触れておく。ジェーンは1806年にロンドンで生まれた。しかし父方の家系を辿るとウェールズのモントゴメリー州、アスガヴェルにたどり着く。したがって彼女はウェールズ系ということになる。彼女は小さいときから病弱であったため、ブレコン州で人生の半分以上を過ごした。彼女はそこでウェールズ語やウェールズ文化に興味を抱き、ウェールズ文化の熱烈な擁護者であったラノーヴァー夫人(Lady Llanover)ことオーガスタ・ホール(Augusta Hall:1802-67)の仲間に加わる。

18歳のときに詩集を出版し、1838年にはエッセー集を出した。1848年にはその前の年に発表された偏見に満ちたウェールズ教育青書に対する反論『アルテガル、またはウェールズ教育状況調査委員会報告への所見』(Artegall; or Remarks on the Reports of the Commissioners of Inquiry into the State of Education in Wales)を匿名で出版した。その委員会の教育青書は、ウェールズ人は基礎的な教育が欠け、信仰心がなく、飲んだくれで、不道徳であり、特に女性は性的モラルに欠け、それがウェールズでの私生児の多さで証明されているとした。そこで彼女は、委員会が採用した証言は偏ったものであり、信憑性がないばかりか、調査自体が偏見に満ちたものであると反論した。事実、委員会の証人となった者の大多数は英国国教会信徒であり、ウェールズで大半を占める非国教会信徒は無視されたのであった。彼女はその本で確かな証拠を挙げ、委員会が証拠としたものを論破した。このことから分かるように、彼女は学問的な手続きでウェールズ人とウェールズ文化を擁護したのであった。この手法による検証の仕方は、その後の彼女の作品の特徴となった。それはエリザベス・デイヴィス自叙伝にも生かされているばかりか、彼女が1869年に出版した著書『確認さ

れた資料に基づくテューダー朝終焉までのウェールズ史』(A History of Wales derived from Authentic Sources down to the end of the Tudor period)となって花開いたのであった。この彼女のウェールズ史は、サー・ジョン・ロイド(Sir John Lloyd)のウェールズ史が現れるまで、もっとも権威のあるものであった。

彼女が最初に書いた伝記は、ウェールズ語とウェールズ語文化の擁護者であり、アイステズヴォッドの推進者であった牧師、トマス・プライスに関するものであった。その伝記は、彼の遺作と共に『トマス・プライス遺作集と彼の生涯』(The Literary Remains of the Rev. Thomas Price, Carnhuanawc... with a Memoir of his Life)として、1854年から1855年にかけて出版された。また同系統のものとして1861年に『イングランドの女流文学者』(The Literary Women of England)を出版している。

2

エリザベス・デイヴィスことエリザベス・カドワラドゥルは、ダヴィッド・カドワラドゥル(1752-1834)の娘として1789年5月24日に北ウェールズのバラで生まれた。父ダヴィッドは、カルヴァン主義メソジスト教会の説教師であり、同じくカルヴァン主義メソジスト教会の中心的人物であったトマス・チャールズの親友であった。(エリザベスは子供の頃、チャールズ・トマスから小型の聖書を貰い、生涯それを大切に使ったという。⁴⁾

バラの主要産業はウールの手編み製品であった。リューマチを患ったジョージ3世は、バラで製造された靴下を穿いていたといわれるが、それほどバラの靴下は特に有名であった。バラでは男も女も、老いも若きもみな編み物をした。歩きながらも編み物をするということで、バラの人々の勤勉さが有名になったほどである。夏は彼らは、ローマ軍の砦跡の築山トメン・ア・バラ(Tomen y Bala)に集まり、編み物をした。冬は、女性たちは順番に家をかえて集まり、火を囲み、古い物語や歌やハーブの演奏を聞きながら編み物をしたという。このような集まりは、カモルス・グワイ(Cymorth Gwai) すなわち「編み物をする集会」と呼ばれたとトマス・ペナントは記している。⁵⁾

説教師であったエリザベスの父ダヴィズも編み物をした。彼が編む速度は大変速かったという。彼は編みながら説教を考えていた、と娘エリザベスは語っている。のち、彼はウェールズ中に名の知れ渡った、大変有名な説教師となった。

1795年に母親が死ぬと、エリザベスは不承不承であった長女の世話を受けることになった。しかし彼女はすぐに姉に対し反抗的になり、家出をする。すでにこの時期に、彼女の「反抗的」性格の一部は形成されつつあったといえる。その後、地主のサイモン・ロイドの家に引き取られ、そこで大切に育てられ、読み書きやダンス、そしてトリプルパープの演奏を習ったという。

しかし、14歳のとき、もっと広い世界を経験したいという思いから、突然家出し、チェスターの叔母の家へ行った。叔母は家に帰るようにと諭し、バラに帰るための旅費2ポンド10シリングを渡すが、エリザベスはバラには帰らず、その金を持ってリバプール行きの船に乗ってしまう。彼女はリバプールでは、エリザベス・デイヴィスと名乗った。デイヴィスと名乗るようになった理由を彼女は次のように言っている。

I was always known in Meirioneth as Betsy Pen Rhiw. On coming first to Liverpool, I called myself by my proper name, Elizabeth Cadwaladyr; but on finding that the English people could not pronounce that surname, I afterwards adopted my father's Christian name instead, and signed myself Elizabeth Davis; my elder brothers and sisters having done the like, in changing Cadwaladyr for Davis.⁶⁾

ここにウェールズ人がイングランドに同化していく上での苦勞を見ることができる。家系図を思わせるようなウェールズの伝統的な姓名表示形式がイングランド人に疎まれ、次第にイングランド人の様な姓名形式に変えさせられたうえ、さらにウェールズ人はイングランドで生きて行くために伝統的なウェールズ人の名まで捨てなければならなかったのである。

彼女はメイドとして働きながら、ウェールズ・カルヴァン主義メソジスト教会に通った。また彼女の

雇い主が旅行するたびにエリザベスも同行した。エディンバラとグラスゴーでは当時もっとも有名な女優であったウェールズ生まれのサラ・シドンス(Sarah Siddons: 1755-1831)の演じる劇を見ることができた。また1815年にヨーロッパ大陸の国々を訪れ、その時にワーテルローの戦いの5日後の戦場を訪れている。

1815年の末にリバプールに戻るが、婚約者を海難事故で失い、失意の余りインドに行く一家にメイドとして同行することを決意するが、父の反対に思い中止した。その後バラに戻るが、見合い結婚をさせられそうになり、再びチェスターに「逃亡」し、そこからロンドンへ行った。ロンドンでは、彼女の遠縁にあたるというグラナゴルスの子ジョーンズの家滞在する。上流社会相手の華やかな仕立屋のメイドとなったエリザベスは、篤い信仰心をもって教会に通う一方で、また逸る心で劇場にも通った。この彼女の信仰への情熱と、演劇への興味といった相反する心理のなかに、実は、メソジスト復興以前と以後の新旧ウェールズの精神的風景が凝縮されているのである。カルヴァン主義メソジスト教会が、ウェールズ人の心から、楽天的で陽気な気質を払拭してしまったといわれているが⁷⁾、エリザベスの心の中では、メソジストの文化がウェールズを席卷する以前の、楽しく、快活で、寛容に溢れた精神が、彼女の演劇への強い関心として残っていたのであった。また一方で、肌身離さず持ち続けた聖書と、教会へ必ず通うという習慣に表れている親譲りの信仰心は、新しいウェールズの文化風土を象徴しているのである。

1820年、エリザベスは一時バラに戻るが、今度は船長の家族のメイドとなり、その家族に伴い、西インド諸島、オーストラリア、タスマニア、中国、インド、アフリカ、南アメリカを巡った。その間彼女は、有名な宣教師や主教や様々な有名人とも数多く会った。また、多くの結婚申し込みがあったが、彼女はそれらを断ったとも言っている。

1835年頃ロンドンに戻り、1年前に父ダヴェドが死んだことを知る。彼女は航海中に貯めた全財産をはたきロンドンに家を買うが、それは詐欺であった。エリザベスは無一文になり、再びロンドンでメイドとして働くことになる。彼女がある家でメイド

として働いていたとき、シェイクスピア好きの彼女が偶然調理場で『ハムレット』をひとりで演じていると、客としてその家にやって来ていた芝居の興行主チャールズ・ケンプル(Charles Kemble: 1775-1854)の目にとまり、週給五ポンドで芝居をしないかともちかけられたが、彼女はその申し出を断ったという。エリザベスはそう言っているが、このブレコン生まれの俳優兼興行主は1836年に隠退し、1840年に数日コヴェントガーデンで公演しただけなので、この話には真実かどうかは疑いが残る。

その後、1849年頃までウェールズやロンドンでメイドとして働く。それからロンドンのガイズホスピタルで看護婦として1年余り働いたが、それが1854年のメアリー・スタンリー(Mary Stanley)の率いるクリミア戦争第2次看護婦派遣団の一員としてのトルコ行きに繋がり、エリザベスを、東の間ではあるが、世界史の表舞台に出すことになる。彼女が65歳のときであった。

3

クリミア戦争(1853年～1856年)は南下策をとるロシアに対し、オスマントルコ、イギリス、フランス、プロイセン、サルディーニアが連合して戦った戦争で、黒海に突き出たクリミア半島の南部にあるセバストポリ湾のロシア黒海海軍基地の攻略をめぐる戦いとなった。イギリス軍は3万の兵をクリミア半島に上陸させたが、十分な輸送手段がなく、医薬品や食料、運送用の馬車などの戦闘用以外の物資や車両は、思うように戦場に輸送できなかった。この医薬品や食糧の欠乏は、のち、深刻な被害をイギリス軍にもたらすことになる。1854年9月20日、57000の兵力からなる連合軍は、アルマ河畔でロシア軍を打ち破ったが、結局北方からセバストポリを攻略することはできなかった。

しかしこの戦いの第一報は、誤報であったが、セバストポリの陥落という形でイギリスに伝えられた。ちょうどそのときウェールズを旅していたジョージ・ボロー(George Henry Borrow: 1803-81)は、スランゴスレンの一マイル手前の路上で、郵便馬車の男が「セバストポリ陥落」と叫ぶのを聞いている。10月3日のことであった。その日、スランゴスレ

ンの町は歓喜に包まれ、教会書記はその詳細を次のように語るのをポローは聞いている。

“Now,” said the old church clerk, “I will tell you all about it. The allies landed about twenty miles from Sebastopol and proceeded to march against it. When nearly half-way they found the Russians posted on a hill. Their position was naturally very strong, and they had made it more so by means of redoubts and trenches. However, the allies, undismayed, attacked the enemy, and after a desperate resistance, drove them over the hill, and following fast at their heels entered the town pell-mell with them, taking it and all that remained alive of the Russian army. And what do you think? The Welsh highly distinguished themselves. The Welsh fusiliers were the first to mount the hill. They suffered horribly --- indeed almost the whole regiment was cut to pieces; but what of that? They showed that the courage of the Ancient Britons still survives in their descendants.”⁸⁾

しかし、新たなニュースが届き、セバストポリ陥落は誤報であることが明らかになった。ポローは次のように記している。

Then came the news of the commencement of a seemingly interminable siege, and of disasters and disgraces on the part of the British; There was no more shouting at Llangollen in connection with the Crimean expedition.⁹⁾

ポローの言のごとく、この戦争に関するその後のニュースは、イギリス国民を憤慨させたのである。「タイムズ」紙のウィリアム・ハワード・ラッセル従軍記者はこれまでに知らされることの無かった傷病兵たちの悲惨な実体を報道した。

“It is with feelings of surprise and anger that the public will learn that no sufficient preparations have been made for the care of the wounded. Not only are there not sufficient surgeons . . . not only are there no dressers and nurse . . . there is not even linen to make bandages. . . . Yet . . . there is no preparation for the commonest

surgical operations! Not only are the men kept, in some cases for a week, without the hand of a medical man coming near their wounds, not only are they left to expire in agony, unheeded and shaken off, though catching desperately at the surgeon as he makes his rounds through the fetid ship, . . .”¹⁰⁾

この報道はイギリス中に衝撃を与え、戦場への看護婦派遣の必要性が叫ばれるようになった。政府は看護婦派遣の必要性を認め、フローレンス・ナイティンゲールに派遣看護婦団を組織するよう命じ、彼女を「トルコ領における英国陸軍病院の女性看護要員の総監督」に任命した。看護婦の総数は40名と定められた。看護婦採用は困難を極めたが、結局38名が採用された。内訳は職業看護婦が14名、残り14名は宗教団体関係者であった。修道女たちは、所属する宗教団体の長に従うのではなく、ナイティンゲールの指示に従うことが求められた。

エリザベスはナイティンゲールが看護婦団を組織していることを新聞記事で読み、クリミアに行く決心をした。彼女が看護婦の受付場所に行くと、既に数日前に申し込みは終了し、来週にはその看護団は出発するであろうと告げられた。彼女は次回の看護婦団派遣に望みをかけ、自分の住所を書いたものを手渡した。いつも決断の早いエリザベスが、今回はナイティンゲールの募集に間に合わなかったのは不思議である。しかし、その理由としては彼女のナイティンゲールという名前への躊躇があったものと考えられる。彼女は次のように話している。

Then again I read of Miss Nightingale preparing to take out nurses. I did not like the name of Nightingale. When I first hear a name, I am very apt to know by my feeling whether I shall like the person who bears it.¹¹⁾

この言葉は有名であり、セシル・ウッドダム=スミスの『ナイティンゲール伝』ではエリザベスのナイティンゲール批判が、このナイティンゲールという名前への好き嫌いに代表されるように、たわいもない偏見に基づくもので、多分に感覚的なものであり、信憑性がないことを強調するために引用されている。後のエリザベスのナイティンゲール批判が名前

から来る偏見に基づくものかどうかは別として、このエリザベスの言葉には彼女の「名前」に対するある種の抑圧された複雑な心理や感情を見ることが出来る。先に述べたように、14歳でリバプールに家出した彼女は、カドワラドゥルというこの伝統的なウェールズの名の発音がイングランド人には難しいため、デイヴィスと変えた経緯があった。

4

ナイティンゲールの看護団は10月21日、ロンドンを出発した。一行がトルコのスクタリにある兵舎病院に着いたのは11月5日のことであった。その間、10月25日にはセバストポリの南のバラクラヴァ付近で、ロシア軍の砲火が三方から待ちかまえる半リーグ(2.4キロ)先の溪谷に、イギリスの軽騎兵隊が何の援護もなく突撃するという戦いが起きた。これは無益で無謀であったが、もっとも勇敢な騎兵突撃のひとつとして歴史に名を残した。突撃した673人の騎兵のうち、戦い後の最初の点呼に集まったものはわずか195人であった。この報道を「タイムズ」紙で読んだ詩人テニスン(Alfred Tennyson:1809-1892)は、有名な「軽騎兵の突撃」("The Charge of the Light Brigade")という詩を書いた。

Half a league, half a league,

Half a league onward,

All in the valley of Death

Rode the six hundred.

'Forward, the Light Brigade!

Charge for the guns!' he said:

Into the valley of Death

Rode the six hundred.

"The Charge of the Light Brigade", ll. 1 - 8.

11月5日にはロシア軍がセバストポリ北方のインカーマンを攻撃したが、イギリス軍が勝利を得た。しかし、セバストポリの攻略には時間がかかることが予想された。冬となり、厳しい環境と医薬、食糧、その他の物資の不足で、傷病兵は増えるばかりであった。彼ら傷病兵は480キロ後方のスクタリに船で運ばれた。

ナイティンゲール一行がスクタリの病院に到着したとき、兵舎病院は病院の体をなしていなかった。病院の劣悪な衛生状態は、病院に送られること自体が死を意味するほどであった。ウッダム＝スミスはその兵舎病院の劣悪な衛生状態と兵士の死の関係を次のように記している。

... the vast building hid a more fatal secret. Sanitary defects made it a pest house, and the majority of the men who died there died not of the wounds or sickness with which they arrived but of disease they contracted as a result of being in the hospital.

The catastrophe which destroyed the British Army was a catastrophe of sickness, not of losses in battle. There were two different sicknesses. The troops on the heights before Sebastopol fell sick of diseases resulting from starvation and exposure. When they were brought down to Scutari and entered the Barrack Hospital they died of fevers resulting from the insanitary construction of the Barrack Hospital assisted by insufficient food, filth and overcrowding. The second sickness was the more fatal. When the war was over it was found that the mortality in each regiment depended on the number of men which that regiment had been able to send to Scutari. Men who were kept on the heights before Sebastopol in the hideous discomfort of makeshift regimental hospitals frequently recovered, those who were brought into the Barrack Hospital died. In the months of January and February 1855, when the disaster was at its height, the average number of patients in the hospital at any one time was 2349 and in the same period 2315 men died. This figure was held to be an underestimate. In the confusion which then prevailed a large number of deaths were not recorded.¹²⁾

ヒュー・スモール(Hugh Small)は彼の著書『フローレンス・ナイティンゲール、復讐の天使』(*Florence Nightingale, Avenging Angel*)で、クリミア戦争から帰還したナイティンゲールが、その後10年間原因不明の病で病床に伏した原因が、実はこの彼女の監督下にあった不衛生な兵舎病院で死んでいった16000名の傷病兵に対する仮借の念であったとした。興味あ

る説である。それほど兵舎病院が悪病の巣であったことは確かである。

ナイティンゲールはそのような病院内で、看護組織を作り、指揮系統を整備し、また物品請求の手続き方法の確立や人間関係に忙殺される。そこにクリミアから夥しい傷病兵が送られてきたのであった。病院業務が一応軌道に乗ったとき、新たな問題がもち上がった。12月14日彼女は突然、彼女の知らぬ間にメアリー・スタンリー(Mary Stanley)を長とする第2次看護婦派遣団が結成され、それも翌日15日にスクタリに到着するという知らせであった。

メアリー・スタンリーはナイティンゲールの友人であったが、純粋な看護という立場ではなく、宗教的情熱と功名心から派遣団の長になったという。その看護婦団は、貴婦人9人、尼僧15人、看護婦22人からなっていた。この派遣団に関しては当初から、尼僧の構成がカトリックと、英国国教会のなかでもカトリック的色彩の強い高教会派に偏っていることが指摘されていた。セシル・ウッドハム=スミスは、その看護婦たちに関し次のように記している。

Many of the "hired nurses" were ludicrously without experience, one old woman, Jane Evans, having spent her life looking after pigs and cows.¹³⁾

... most of the women had come out in the hope of getting husbands, and drunkenness was universal. Writing a character of each of her party to Liz Herbert, Mary Stanley admitted that the women chosen were too old.¹⁴⁾

ナイティンゲールに何の相談もなく結成され、不適格な看護婦を数多く含み、また宗教的所属に関しても極端に偏った構成であり、何よりもナイティンゲールの「トルコ領における英国陸軍病院の女性看護要員の総監督」という地位を無視したばかりか、特に看護婦の指揮系統に多大の問題を残す元となったメアリー・スタンリーの看護婦団に対し、彼女が驚きと不審と怒りの念を抱いたのは当然であった。そのスタンリーの看護婦団の一員であったのが、ウェールズ人看護婦エリザベス・デイヴィスであった。エリザベスにとって、スタンリーの一行に加わった

ことが不運であった。

一行が到着し2ヶ月も経つと、スタンリーの看護婦団は分裂してしまった。ナイティンゲールの第2次看護婦派遣団にたいする権限の問題や、第一次派遣団では解決できたカトリック修道女に対する監督権の問題が、この分裂の背後にあった。アイルランドから派遣された慈悲聖母童貞会は、第一次の派遣ではマザー・ムーアのもとにあり、修道女たちは看護に関してはナイティンゲールの指示にしたがった。しかし、第2次派遣団のマザー・ブリッジマンはナイティンゲールの権威を認めず、アイルランドの大司教の命に服した。この背景には、イングランドとアイルランドの、カトリックとプロテスタントの歴史的、本質的な問題があった。アイルランドから派遣された修道女たちは、イングランドの利益のために戦争にかり出され、常にイングランドのために戦わされている同胞アイルランド人兵士を看護するためにやってきたのであった。¹⁵⁾ クリミアに派兵された兵士の実に3分の1がカトリック教徒のアイルランド人であった。(事実彼女たちはすばらしい働きをしたが、ナイティンゲールからは、それに足りる評価は何も受けなかった。)この両者の確執は、結局マザー・ブリッジマンと修道女が、他の病院に転出することにより決着した。

5

1855年1月、イギリス軍総司令官ラグラン卿は、看護婦を11人クリミア半島のバラクラヴァ陸軍病院に派遣することを要請した。スクタリは前線より480キロも離れていた。しかし、ナイティンゲールは、すでに病院調査委員会がこの病院に関して好ましくない報告をしていたので、看護婦たちを行かせたくはなかった。

... it was filthy, inefficient, the orderlies were undisciplined, and Balaclava was even more crammed with troops than Scutari. However, certain nurses, led by a Welshwoman, Elizabeth Davis, from Mary Stanley's party, were determined to escape Miss Nightingale's discipline, and she herself was unwilling to refuse Lord Raglan. She gave way, and eleven volunteers under the

control of the Superior of the Sellonite sisters went to Balaclava.¹⁶⁾

ナイティンゲールはスクタリに到着すると、数週間傷病兵の看護にあたったが、それからは主として病院管理、維持といった仕事に没頭した。彼女は看護婦のひとつの役割は、雑役兵に病院内の仕事を教えることであると考えた。それには彼女らがその模範を示すことが必要であり、そのために看護婦には厳しい規則を課した。しかしエリザベス・デイヴィスらが前線への派遣を望んだのは単に「ナイティンゲールの厳しい規律から逃げ出す」ためだけではない。それはもっと前向きな感情からであり、エリザベスはイギリスを発つ時からクリミア行を希望していた。

『自叙伝』によると、第2次派遣看護婦団結団式のあった日に、彼女はある紳士にクリミアで働きたいとの希望を話す。すると "My good woman, you must be either drunk or mad! You would be amongst our enemies. It would be quite presumptuous to think of such a thing. We have not the least idea of establishing a hospital in the Crimea."¹⁷⁾ という厳しい答えが返ってきた。おまけにスクタリの病院に着くと、看護の仕事に就かせてはもらえず、数日間古いシャツの繕いをさせられたのであった。¹⁸⁾ 彼女の心には一層、看護婦としての仕事がしたいという気持ちがますます強くなった。それは病院の管理と改革に携わる総監督としてのナイティンゲールの立場とは異なる、ひとりでも多くの兵士の命を救いたいという看護婦の偽らざる気持ちであった。

ナイティンゲールはエリザベス・デイヴィスの看護の腕を買っていたようである。エリザベス・デイヴィスは、第2次看護婦派遣団のなかの酒飲みで「亭主でも見つけようという気分で作ってきた」他のお雇い看護婦とは一線を画した存在であった。その彼女が、女史の「懇請」にもかかわらず、「ナイティンゲールの厳しい規律」から逃げ出してしまったのであった。ナイティンゲールがどのような「懇請」をしたかは伝記には書かれていないが、『自叙伝』の2人の会話からそれが次のようなものであったことが分かる。

On Monday, at noon, Miss Nightingale sent for me --- after speaking very politely, and telling me to sit down, she said:

"I understand that you have been upsetting my nurses."

I said, "No, I have nothing to do with anybody but myself, but I want to go home if I can't go to the Crimea."

She inquired, "Why?"

I said, "Because I don't like this place, nor anybody in it, nor do I like the system."

"You don't like me, then?" she said.

"No, I don't," I said, "but I never saw you before."

"Before I go any further," said Miss Nightingale, "I want to impress one thing particularly on your mind. If you do go to the Crimea, you go against my will."

This put up my Welsh blood, and I told her that neither man nor woman dared to accuse me of misbehaving myself. I had too much regard for my employers to do that, even if I had none for myself.

She informed me that she had made me over to a new superintendent, and I said (my Welsh blood being up again),

"Do you think I am a dog, or an animal, to make me over? I have a will of my own."

I persevered in my intention of going to Balaclava, and she observed, "Well, Mrs Davis, I can't let you go without some one to overlook you. If you do go," she added, joining her open hands sideways together, and then forcibly dividing them, and spreading out her arms by her sides, "I have done with and your new superintendent *entirely*."¹⁹⁾

セシル・ウッドダム=スミスはこの件は伝記に取り入れてはいないが、かなり厳しい会話が両者の間にあったことが窺える。エリザベス・デイヴィスは、バラクラヴァ行きの張本人と目されていただけに、セシル・ウッドダム=スミスの筆は厳しい。

A constant rebel was Mrs. Elizabeth Davis, the Welshwoman brought out by Mary Stanley. She had begun to dislike Miss Nightingale before she saw her. "I

did not like the name of Nightingale. When I first hear a name I am very apt to know by my feelings whether I shall like the person who bears it”, she wrote. She had had experience in nursing, and was selected for the Barrack Hospital. Once there she proved a storm centre. She refused to obey orders or to conform to the system for the distribution of the “Free Gifts”. She accused Miss Nightingale of using these for her own comfort and alleged that, while the nurses were fed on filaments of the meat which had been stewed down for the patients’ soup, Miss Nightingale had a French cook and three courses served up every day. Finally, she joined the party of eleven volunteers who went, against Miss Nightingale’s wishes, to Balaclava in January 1855.²⁰⁾

ここに掲げられているエリザベスの罪状は確かに『自叙伝』の中に書かれており、エリザベスにとって『自叙伝』は彼女には不利な証拠となってしまう。この伝記作家はこの『自叙伝』を逆手に使い、エリザベスの「悪辣さ」を証明しようとしたのである。しかし他の看護婦の証言もあるように、患者用スープを煮出した後のものは別として、看護婦たちの食べたものが滓肉の繊維のようなものであったことは確かである。おまけに栄養不足の看護婦には貴重な食品であったミルクや卵も、少しではあるが看護婦から取り上げられ、ナイティンゲールの食卓へと供出されたという。²¹⁾ 実際にナイティンゲールが毎日、三品料理を食べたかどうかは分からないが、そのような噂が生ずるほど、看護婦の食事は粗悪であったのである。このフランス人のコックについて一言付け加えておくと、ナイティンゲールは病院での給食をより良いものとするために連れてきたもので、実際にそのフランス人のコック、アレクシス・ソワイエ(Alexis Benoit Soyer:1809-58)は病院の患者食の改善に多大な功績を残したのであった。²²⁾

エリザベスは最初からクリミア行きを希望していた。その上、彼女はスクタリの兵舎病院が嫌いであったし、そこにいる人が嫌いであった。また何よりもその規則が大嫌いであった。特にナイティンゲールの諸規則は現実を無視した、融通の利かない、官僚的なものに思えたからであった。ナイティンゲ

ールは看護婦団の総責任者という権限の他に、国民からタイムズ紙に寄付されたいわゆる「タイムズ基金」の執行と、本国からの慰問品の配布に責任を持っていた。タイムズ基金は効率よく運用された。しかし問題は慰問品であった。ナイティンゲール自身が「これらの煩わしい寄贈品」²³⁾と呼んだ慰問品は大変厄介なものであった。届いた慰問品は種類により仕分けされ、ナイティンゲールの秘書役を果たしたブレースブリッジ夫人(Mrs Bracebridge)により台帳に記入され、管理された。

慰問品を必要に応じて分配することは非常な困難を伴った。この慰問品の授受は、それがどのようなものであろうと2名の医師の署名を必要としたため、授受分配の効率が悪くなった。また医師はナイティンゲールに頭を下げることも嫌であったからだ。それらの結果、多くの慰問品は活用されることなく死蔵されたあげく、配布できなかった慰問品は最後にはイギリスに送り返され、一般人に安売りされたという。²⁴⁾ また本国から送られて来たこれらの善意の慰問品には、看護婦は近づけなかった。その理由を”If the nurses had unrestricted access to the ‘Free Gifts’ they took articles out and gave them to their favourite patients or helped themselves.”²⁵⁾とこの伝記作家は述べているが、ここにはナイティンゲールとは言わないまでも、セシル・ウッドダム=スミスの看護婦に対する不信感が現われている。

またその授受システムも欠陥だらけであった。例を挙げると、医師が患者にゼリーを与えようとして請求を書くとする。そのときは、その支給命令書に従い、請求されたゼリーは支給される。そこまでは良い。医師は次の指示があるまではそのゼリーが患者に与え続けられると考えるが、実はそうではなく、継続する場合はその都度、何度も何度も同じ注文書を書かなければならなかった。²⁶⁾

もうひとつ例を挙げる。慰問品として送られて来た食料品は適切に分配されることなく、食べられなくなった後に看護婦に押しつけられたのであった。

“The nurses used to have some of the eatables served out to them from the ‘free gifts’, such as jams, herrings, sausages; but these things had often been kept until they were bad, before the nurses got them.

“The plum-puddings which the good people of England sent out for Christmas Day, were never distributed to the sick soldiers; but long after, when they were quite mouldy and spoiled, and had spoiled everything they were packed up with, they were placed on the nurses’ table.”²⁷⁾

このように、官僚的な管理と授受の規則により、慰問品は十分に活用されることなく死蔵され、食料品に至っては食用に適さなくなると看護婦の食卓に廻ってくるのであった。しかしすべては「規則」に従って行われた結果なのだ。

エリザベスは1855年1月の或る金曜日に、新しい監督者でセロン派の尼僧院長のエルドレス尼僧長 (Morhwe Eldress ラングストン女史, Miss Langston) らとクリミア行きの船メルボルン号に乗りスクタリを離れた。日曜日にはコンスタンティノーブルでセラピア(Therapia)からやって来た同僚の貴婦人たちと合流した。1週間後の日曜日にバラクラヴァに着くが、木曜日まで船を下りることができなかった。クリミアの病院に着くとエリザベスは病気や負傷した兵士がベッドではなく、架台に板を載せた上で寝ているのを見て驚いた。彼女はさっそくベッドを要求した。それはすぐに実現した。物品は豊富にあったのだ。ただそれを言い出す者がいなかったのである。その後3月の最初の火曜日に尼僧長エルドレスから調理場を任された。その調理場はショー・ステュワート夫人により食料その他が潤沢に運び込まれた。ナイティンゲールも認めるほど劣悪な環境の中で、エリザベスは、昼は食事の世話に当たり、ときには夜も看護についた。『自叙伝』には彼女の1日の様子が次のように記されている。

Every morning at eight o’clock I served the soldiers’ breakfasts to the orderlies of the wards, and the officers’ breakfasts at nine.

At ten I gave out luncheon for the extra-diet patients, and at noon I served the dinners --- dividing each man’s portion separately, and delivering them all to the orderlies of the wards.

As soon as this was done, I prepared dinner for the

officers, and then I followed the orderlies who carried it in, that I might feed the patients who could not lift their hands to their mouths.

At five, I got tea ready for them; and at seven or eight o’clock, according to their need, I sent the suppers in.

At ten at night, I gave out drinks and arrow-root for the bad cases. The doctors used to come backwards and forwards with orderlies, from nine to eleven o’clock, ordering wine and other things to be given --- perhaps every ten minutes to some patients.

I never got to bed before twelve, and was generally out of it four or five times in the course of the night, to attend to the orderlies, before five o’clock in the morning.

At that hour I always rose to go about my daily business.

²⁸⁾

6

1855年5月、スクタリの病院の改革が一段落したとき、ナイティンゲールはバラクラヴァの病院を視察するために、クリミア半島に向け旅立った。というのは、彼女のもとを去りバラクラヴァの陸軍病院に行った看護婦団の「悪い噂」が彼女のところに届いていたからであった。この「悪い噂」が誰によってナイティンゲールにもたらされたかに関しては、エリザベスはナイティンゲールの叔父と名乗るS氏を挙げ、次のように言っている。

It was on one of the last days in March, that I first saw Mr. S_____, who called himself Miss Nightingale’s uncle. He was said to be connected with the London newspapers and certainly appeared to come on purpose to spy about and pick up information. . . He went very often and from Scutari. I think he was the means of first bringing Miss Nightingale to Balaclava.²⁹⁾

バラクラヴァでのエリザベスの行状はセシル・ウッドダム=スミスによるとこうなる。

Once there she made an alliance with Dr. John Hall, and another important personage in the Crimea, Mr. David FitzGerald, the Purveyor-in-Chief. Mr. FitzGerald

was as angrily opposed to Miss Nightingale as was Dr. Hall, and as equally determined to keep her out of the Crimea.

Elizabeth Davis, an excellent cook, had assumed command of the kitchen in Balaclava General Hospital, which she conducted with rollicking extravagance, rejoicing in feeding up the handsome young officers who were her special pets. It was Miss Nightingale's rule that none of her nurses should attend on or cook for officers except by special arrangement. At one issue Mrs. Davis received "6 dozen port wine, 6 dozen sherry, 6 dozen brandy, a cask of rice, a cask of arrowroot, a cask of sago and a box of sugar"; and her requisitions for the General Hospital were filled at once by Mr. FitzGerald without being countersigned by Dr. Hall. The situation became too much for the Superintendent, the Superior of the Sellonites, who Miss Nightingale said, "lost her head and her health", collapsed, and went home. . .

With the "Free Gifts" Mrs. Davis and her allies were even more open-handed. In an orgy of distribution ninety bales and boxes were given away without any record of who had received them.³⁰⁾

ここでは、「ナイティンゲールの厳しい規律」から逃れたエリザベス・デイヴィスが我が世の春を謳歌している様が描かれている。とくに美男の若い将校たちには、浮き浮きしてご馳走をたっぷりと振舞ったりした、という件には、彼女が 65 歳であるということを思うと、微笑みすら浮かべざるを得ない。だが、これに当たるような記述は少なくとも『自叙伝』にはない。将校のために看護婦が食事を作ることは、特別の例外を除いては禁止されていた。しかし非難されている豪華な大量の物資の給付に関しては、看護監督の書名入り支給命令書を貰っているので問題はなさそうである。セロン派の尼僧長エルドレスに関しては、エリザベスは次のように述べている。

Upon the first Tuesday in March, Mother Eldress established me in the kitchen, and gave me the entire charge of it. She said she saw I should do well, and could trust me; therefore, as she had much writing and

many other things to do, she should not often come there. That very day she was taken ill, so she never afterwards visited the kitchen. I used to report to her by word of mouth, every evening during the three weeks which she remained. Miss Erskine then came to fetch her to Scutari, and Mrs Bull, the nurse, went with her, when Miss Langston left for England.³¹⁾

このエリザベスの言を信じれば、その尼僧長とエリザベスの関係がことさら悪いものでもなく、彼女がエリザベスに怒りを覚えていたとは到底思えない。慰問品の大量振に舞いに関してはエリザベスがショー・ステュアート夫人の残した慰問品の管理係となったときに彼女が行なったことを指しているのであろう。彼女はこの様に書いている。

I had all that were left of Mrs Shaw Stewart's stores in charge, to give out at my own discretion. All the free gifts were disposed of in the same way, by the superintendent's orders, to the nurses, or else sent by the fatigue parties to the camp.³²⁾

『自叙伝』の側からナイティンゲールの第 1 回目のバラクラバ視察を見てみよう。ある日、総司令官のラグラン将軍が調理場を訪れ、ナイティンゲール女史がバラクラバを訪問することをエリザベスに伝えた。すると彼女は次のように答えた。

That day Lord Raglan and his staff came to the kitchen, and talked with me as usual.

I said --- "I understand, my Lord, that Miss Nightingale is gone up to the camp?"

"Thank God! I am very glad of it," he replied.

Colonel Somerset remarked --- "You do not like her?"

I answered --- "No; and I don't know what she wants here."

What pleased Lord Raglan was the arrival of more nurses, for they were badly wanted.

I did not see Miss Nightingale until the Friday after her landing.

She went through the hospital on that day with Miss wear, and came to the kitchen where I was very busy,

saying ---

“How do you do, Mrs Davis?”

I answered --- “Very well, thank you,” without raising my head from my work. In a minute or two looked up and exclaimed ---

“Oh, Miss Nightingale!”

“What! Did you not know me?”

Yes, ma’am; but I should as soon have expected to see the queen here, as you.³³⁾

この箇所からも 2 人の険悪な関係がよく分かる。この後デイヴィスが将校に出す食事についてのナイティンゲールの批判が記されている。

Miss Nightingale objected to my cooking for the officers, and using government stores for them --- she said they ought to find their own. However, I went on doing what I thought best, for they were then as much in need as the privates, although some of them were gentlemen of large fortune.³⁴⁾

これは先に引用したが、看護婦は、特別の取り決めがある場合は例外として、将校の世話や調理は禁ずるとするナイティンゲールが定めた規則に抵触する。いくらエリザベスが、兵士であろうと将校であろうと患者は皆等しく患者であるという今ではごく普通である理念を持ち出しても無駄である。規則は規則であった。病院管理というナイティンゲールの観点からすれば、やはり許されないものであった。また 90 個以上の慰問袋が記録もつけないで配布されたことは、死蔵されたままのスクタリの慰問品の扱いよりも、兵士に国民の善意を届けるという点においては良いと思われるが、やはり組織上は好ましくない。規則は規則なのである。しかしこのようなナイティンゲールからの批判にもかかわらず、バラクラヴァでの彼女の仕事に関して、彼女の非を咎める記述は何処にもない。

ただひとつ彼女の『自叙伝』で問題になる点は、エリザベスの看護婦の職務の範囲に対する自覚である。それはナイティンゲールが腐心した看護活動と宗教活動の分離の問題であった。³⁵⁾ ナイティンゲールは看護婦が患者に対し宗教活動をするのを厳

しく禁止した。医療的に手の施しようのなくなった死に行く兵士の魂に関与すること、例えば彼らを宗教的に励ましたりすることは固く禁じられていた。また或るカトリックの修道女はそのような患者の兵士をカトリックに改宗させたため、本国送還となった。兵士への宗教活動は従軍牧師の領分であった。しかしエリザベスはそれには物足りなかったようである。彼女はロンドンを発つとき、聖書協会（バイブルソサエティー）から数十冊の英語とウェールズ語の聖書を預かり、それらをバラクラヴァで兵士に配布した。彼女は患者と看護婦との間の宗教的交流の禁止には不満を持っていた。

It is a melancholy fact that the Superintendent of the Female Nursing Staff did not recognize any religious inter course between the nurses and patients. What ever sis take place was without her authority, and in most instance without her knowledge.

The principle of having nothing to do with their souls was avowed. That care was wholly left to the few chaplains and priests.

The instructions from the War Office accorded with the practical exposition.³⁶⁾

7

そのようにして 10 ヶ月が過ぎ、彼女は健康を害しイギリスへと戻っていった。そして 1860 年 7 月 17 日にロンドンの妹ブリジッドの家で、貧困のうちに波乱に満ちた生涯を閉じた。

アイルランドの慈悲聖母童貞会の修道女の献身的な活動も、ナイティンゲールが得た名声の前にその事実すら広く知られることはなかった。またウェールズの老女エリザベス・デイヴィスに至っては、この自叙伝を逆手にとられ、ナイティンゲールに楯突いた悪い看護婦の典型として、ナイティンゲールの伝記の中で、永遠に汚名だけを残すことになった。

クリミア戦争が終結し、イギリスに帰国したナイティンゲールはその後 10 年、謎の病床生活を送る。これに関しては伝記作家、研究家の意見の分かれるところである。英国陸軍の衛生制度改革のため閉じこもり力を蓄えたのだとか、家族との煩わしい

生活から逃れるためとか、仕事に没頭するためであったとか、偉大な仕事をなした後の「燃え尽き症候群」であったとか、スクタリでの悲惨な経験が引き起こした「心的外傷後ストレス障害」であったとか、諸説紛々としている。³⁷⁾ ナイティンゲールは 90 歳まで生き、衛生制度の改革や、看護の歴史に偉大な足跡を残した。その原点となったスクタリの病院でナイティンゲールも慈悲聖母童貞会の修道女もエリザベス・デイヴィスも、おのおの立場の違いこそあれ、己の信じるところを行なったのである。

ナイティンゲールの名声が高まれば高まるほど、現場で働いた名もない看護婦たちの真実の姿が忘れられ、影が薄くなっていく傾向にある。今後ますます多くの人々がナイティンゲールの伝記を読むであろう。一方、ウェールズ人看護婦エリザベス・デイヴィスの伝記が一般読者の目に触れる機会は少ないであろう。エリザベスがナイティンゲールに逆らった「敵役」の看護婦として、今後ますますナイティンゲール伝のなかで定着していくのは確かなことであるように思える。しかしそれは、いかにも口惜しいことである。

注

1. Cecil Woodham-Smith, *Florence Nightingale 1820-1910* (Constable, London: 1950), p. 193.
2. *Ibid.*, p. 215.
3. セシル・ウッドサム＝スミスの伝記ではデイヴィス「夫人」となっているが、彼女は未婚である。
4. Williams, Jane (ed.) *The Autobiography of Elizabeth Davis --- Betsy Cadwaladyr: A Balaclava Nurse* (2nd ed. Honno, Cardiff 1987), p. 199.
5. Thomas Pennant, *A Tour in Wales* (London: White & Hughes, 1781-1784. 2 vols.), vol. 2, p. 68.
6. *The Autobiography of Elizabeth Davis*, p. 18.
7. Prys Morgan, "The Hunt for the Welsh Past in the Romantic Period", *The Invention of Tradition* ed. Eric Hobsbawm and Terence Ranger (Cambridge U. P., 1983) p. 53.
8. George Borrow, *Wild Wales—Its People, Language and*

- Scenery* (John Jones, 1998), p. 286.
9. *Ibid.*, pp. 288-9.
10. Cecil Woodham-Smith, p. 134.
11. *The Autobiography of Elizabeth Davis*, p. 154.
12. Cecil Woodham-Smith, p. 152.
13. *Ibid.*, p. 185.
14. *Ibid.*, pp. 185-6.
15. モニカ・ベイリー他、小林章夫監訳、『ナイティンゲールとその時代』(うぶすな書院、2000年), p. 199.
16. Cecil Woodham-Smith, p. 193.
17. *The Autobiography of Elizabeth Davis*, p. 155.
18. *Ibid.*, p. 162.
19. *Ibid.*, pp. 163-4.
20. Cecil Woodham-Smith, pp. 215-6.
21. *The Autobiography of Elizabeth Davis*, p. 165.
22. Cecil Woodham-Smith, p. 213.
23. *Ibid.*, p. 216.
24. *The Autobiography of Elizabeth Davis*, p. 201.
25. Cecil Woodham-Smith, p. 217.
26. *The Autobiography of Elizabeth Davis*, p. 166.
27. *Ibid.*, p. 167.
28. *Ibid.*, p. 180.
29. *Ibid.*, pp. 182-3.
30. Cecil Woodham-Smith, p. 216.
31. *The Autobiography of Elizabeth Davis*, pp. 172-3.
32. *Ibid.*, p. 187.
33. *Ibid.*, pp. 83-4.
34. *Ibid.*, p. 184.
35. Cecil Woodham-Smith, p. 190.
36. *The Autobiography of Elizabeth Davis*, p. 176.
37. これらの研究は、マリアン・J・プルック、香春知永・菱沼裕子訳「フローレンス・ナイティンゲールの生涯に関する 20 世紀的観点からの一考察」およびシャーリー・ヴァイス、佐居由美・菱沼裕子訳「『隠遁者』---フロレンス・ナイティンゲールの病歴に関する回顧的考察」に詳しい。ともにモニカ・ベイリー他、小林章夫監訳『ナイティンゲールとその時代』に収録されている。

(平成 15 年 3 月 19 日受理)